

14) 原発性肝細胞癌と他臓器癌との重複症例の検討

和田 茂胤・相川 啓子
 豊島 宗厚・曾我 憲二 (日本歯科大学
 新潟歯学部内科)
 柴崎 浩一
 石井 馨・片桐 正隆 (同 口腔病理)
 (新潟大学医学部
 付属病院病理部)
 江村 巖

近年、高齢者の増加と癌の診断および治療法の進歩により重複癌をみる機会が増えている。今回、当科では経験した原発性肝細胞癌(HCC)と他臓器との重複癌10症例について、若干の文献的考察を加えて報告する。

1981年から1997年までの17年間に、当科に入院したHCC患者158例について重複癌合併の有無を調査した。HCCと診断された158例中重複癌は10例で、これはHCC全体の6.3%にあたる。合併した他臓器癌の内訳は、胃癌3例、大腸癌3例、膵臓癌・胆嚢癌・膀胱癌・口腔癌が各1例であった。重複癌患者の平均年齢は61.5歳、通常の単独のHCCは64.6歳であった。異時性重複癌患者の平均年齢は61.6歳、同時性重複癌患者61.4歳、輸血の頻度は異時性で80%、同時性で60%だった。肝硬変併存率は重複癌で70.0%、単独癌で73.4%だった。

今後さらに癌の診断技術と治療法の進歩などによる生存期間の延長に伴い、重複癌の頻度は増加すると考えられ、HCCにおいても重複癌の存在を念頭に置く必要があると考えられる。

15) インターフェロン治療によるHCV-RNA陰性化4年後に発生した肝細胞癌の1例

真船 善朗・黒田 兼
 太田 宏信・吉田 俊明 (済生会第二病院
 上村 朝輝 (消化器内科)
 武田 敬子 (同 放射線科)

C型慢性肝炎患者に対するインターフェロン(IFN)療法による発癌率の低下が報告されている。特に著効例では顕著であり、本例のように、4年以上を経た発癌例は、稀と考えられた。本例の場合、IFN治療時に既に存在していた微小病変が炎症の軽快後も、緩徐に進行してきたのではないかと考えられた。従って、たとえ、著効例であっても、IFN治療後の定期的な経過観察は、欠かせないと考えられた。

16) 肝細胞癌に対するダイナミックMRIの有用性の検討—治療効果の評価について

清野 康夫・斉藤 明 (県立新発田病院
 放射線科)
 太田 玉紀・堀 聡彦
 原 秀範・関根 輝夫 (同 内科)
 安住利恵子・加村 毅 (新潟大学医学部
 放射線科)
 西原 眞美子 (燕労災病院
 放射線科)

当院でTAEまたはPEITを施行した肝細胞癌20症例、30病巣に対して治療前後でMRIを施行し、特にダイナミックMRIの有用性を検討した。

再発群13病巣と非再発群17病巣とで比較してみると、T1、T2強調画像ともに信号強度が低下した症例で予後良好な症例が多かった。

腫瘍濃染パターンでは、濃染なしの症例は全例再発を認めず、濃染ありの症例は大半が再発症例であった。

リング濃染パターンを示した症例は、半数に再発が認められたが、再発なしの症例については経過観察後には全例が濃染なしとなった。また、PEIT症例ではリング濃染パターンを示しても、予後が良い可能性を示唆した。

ダイナミックMRIは、リピオドールによる影響を受けにくく、特にTAE後の評価に有用であると考えられた。

17) 肝癌局所療法としての経皮的マイクロ波凝固療法(PMCT)

加藤 俊幸・孫 巍
 秋山 修宏・船越 和徳
 兎澤 晴彦・須田 浩晃 (県立がんセンター)
 斉藤 征史・小越 和栄 (新潟病院内科)

肝癌に対する局所療法としての経皮的マイクロ波凝固療法(PMCT)を検討した。14G誘導針と深部電極TMD-16を挿入し、60W×60秒間で平均2.5回の凝固を行った。対象は肝細胞癌30例で、平均年齢は68歳(45~87歳)、B型2例・C型27例で、うち87%に肝硬変を合併していた。腫瘍径は1.2~6.4cm(中央値2.7cm)の結節型肝癌で、うち絶対的適応の3cm以下は15例であった。径3cm以下では壊死効果TNV(完全壊死)は12例80.0%、IV(50%以上)3例20.0%で極めて有用であり、6カ月後の局所再発は2例であった。3cm以上ではTNV2例13.3%、IV10例66.7%、III3例で、腫瘍残存のため追加治療を要した。合併症として術中の熱感と穿刺痛を認めたが、重篤なものはなかつ